

国立国会図書館



被災図書館の支援

東日本大震災アーカイブ（ひなぎく） 震災記録の収集を続けています
保存修復とデジタル化の両輪でめざす、これからの資料保存
「デジカフェ」はじめました

世界図書館紀行 韓国・国立世宗図書館

2017.3
No. 671

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00 ※ただし、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
資料請求受付★	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00 ※ただし、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。	後日郵送複写受付★	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30

★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館 利用者サービス部 サービス運営課 03(3581)2331 内線25211

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求受付★	月～土曜日 10:00～17:15	後日郵送複写受付★	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	★登録利用者限定のサービスです。	

■見学のお申込み／国立国会図書館 関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※児童書研究資料室は、システムメンテナンス等のため臨時休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00			
児童書研究資料室の資料請求受付	火～日曜日 9:30～16:30			
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日郵送複写受付	火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00	13:00～16:30	

■見学のお申込み／国立国会図書館 国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

C O N T E N T S

02 アトランティス ー大陸より来たるー

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 被災図書館の支援

11 東日本大震災アーカイブ（ひなぎく） 震災記録の収集を続けています

14 保存修復とデジタル化の両輪でめざす、これからの資料保存

19 「デジカフェ」はじめました

24 世界図書館紀行 韓国・国立世宗図書館

22 TOPIC

- 「明日の文化遺産は今日のデジタル情報の上に成り立つ」オープンサイエンスと図書館、ヨーロッパの事例

30 本屋にない本

- 『陸にあがった海軍：連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争』

13 館内スコープ

ある日の雛ちゃん菊ちゃんの会話

31 NDL NEWS

- 法規の制定

32 お知らせ

- 「日本十進分類法（NDC）新訂10版」の適用を開始します
- 講演会「私が子ども時代に出会った本―志茂田景樹」
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

アトランティス —大陸より来たる—

吉原 努

今回紹介する1冊は、1912年にノーベル文学賞を受賞したドイツの劇作家、ハウプトマン (Gerhart Hauptmann, 1862-1946) の長編小説です。

主人公の医師が、心を病んだ妻を避けるために旅に出、その先々で出会う女性たちに魅かれては、別れを繰り返したのち、家に残した子どもの母親代わりとなる女性と出会うという内容です。紙面の大半が大型客船の乗客や船員のやり取り、主人公から見た情景描写に費やされます。クライマックスは大西洋航海中の大型客船が沈没して、救命ボートに乗った主人公が難をのがれるところでしょう。

英訳本(当館未所蔵)が同時出版され、その翌年にはサイレント映画も製作されました。出版と同時期にタイタニック号の沈没事故が発生したことで、本書は世に知られました。その一方で文学としての評価はあまり高くはなく、「洗練された娯楽小説」とも評されました。

ハウプトマンは、現在はポーランドと已经成为プロイセン領の片隅に生まれました。『日の出前』『織工』『沈鐘』等を発表し、数々の文学賞を受賞しました。トーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) と比べて政治的言動が少なく、国民的作家として親しまれたようです。日本においては、明治期に森鷗外により紹介され、文学全集や岩波文庫に複数の作品が収録されました。

さて、本書には、当館のものとは別に、配架番号と見られるラベルが背に貼られ、また、Kiautschou Bibliothek (膠州図書館) とドイツ語で記された蔵書票、蔵書印が中に残っています (写真1,2)。

19世紀末、ドイツは中国の膠州湾一帯を租借していました。膠州図書館とは、総督府の下で有志からの募金と寄贈図書により設立された図書館でした。

しかし、ドイツは第1次世界大戦に敗戦し、結果として、膠州図書館の蔵書は鹵獲図書という形で日本にもたらされることになりました。これらの図書は「各地大学等ヨリ寄贈移管等ノ申込有之候得共右ハ戦利品ニ付記念ノ為ニ可成公平ニ分配致度」¹ という日本陸軍の意向により、帝国図書館も含めた日本各地の教育機関² に分配されました。本書はそのうちの1冊なのです。このとき分配された図書は『鹵獲書籍及図面目録』(写真3)でも確認できます。当館では長く未整理のままでしたが、重複調査と整理が進められ、近年利用できるようになりました。

本書は無論、アトランティス大陸から来たものではありませんが、ドイツから青島、ユーラシア大陸の東西を経てはるばる当館にたどりついた、数奇な運命を持つ1冊なのです。

(よしはら つとむ

収集書誌部外国資料課)

1 「鹵獲図書目録ノ送付及処分ニ関スル件照会」(大正9年2月27日青参第67号)(欧第1603 48号収載)(アジア歴史資料センターで閲覧可能 <https://www.jacar.go.jp/>)

2 金沢大学等に、同様の由来をもつ洋書が現存します。

参考資料

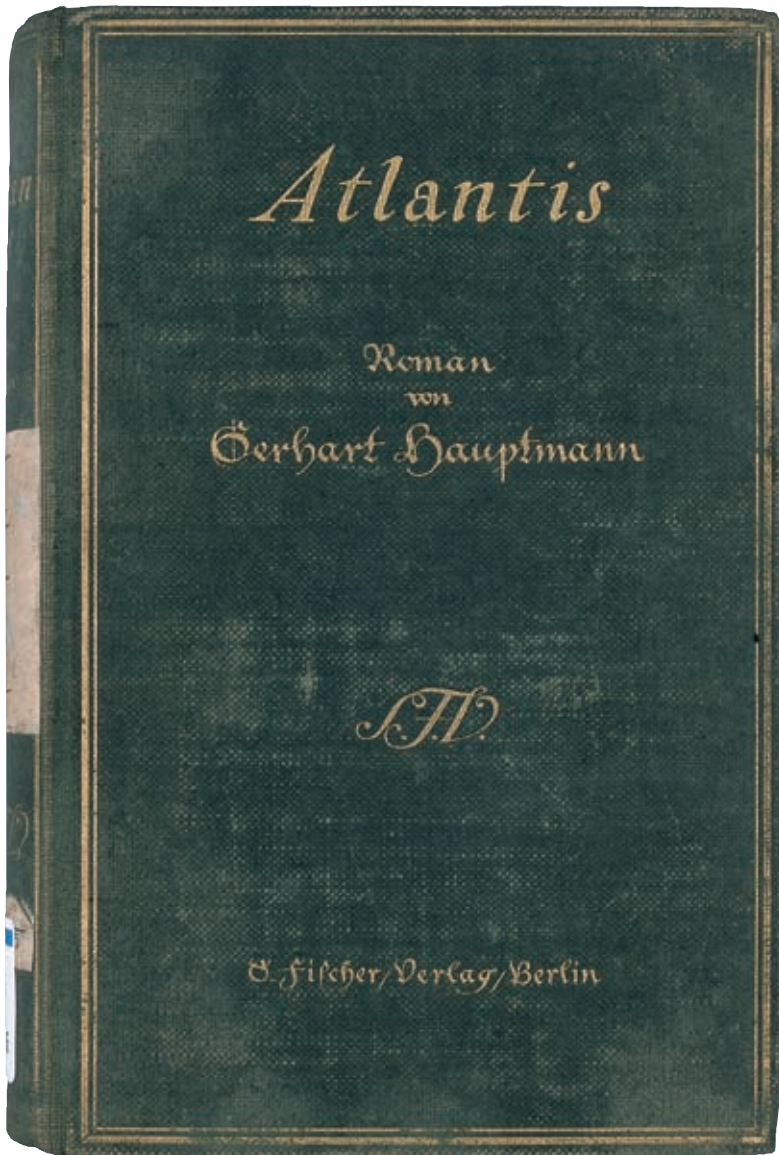
○『新世界文学全集 第8巻』河出書房、昭和16。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1683228>

○中島邦雄「G.ハウプトマンの『アトランティス』にみられる通俗性—早すぎた「古典的現代小説」『上智大学ドイツ文学論集』(通号34)1997
<請求記号 Z12-143>

○志村恵「青島鹵獲書籍について—現在の所蔵を中心に」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』(27)2007.3
<請求記号 Z12-522>

○持井康孝ほか「独逸租借期青島所蔵書籍目録(1)」『金沢大学文学部論集 史学・考古学・地理学篇』(27)2007.3
<請求記号 Z8-2020>

○Metzler Autoren Lexikon. 2. Aufl. J.B. Metzler, c1997.
<請求記号 KS332-A9>



Atlantis : Roman von Gerhart Hauptmann.
S. Fischer, 1912. 357 pages ; 21 cm.
<請求記号 Y995-B4585>
※図書別室閲覧



写真1 見返しに貼られた蔵書票



写真2 標題紙に押された蔵書印

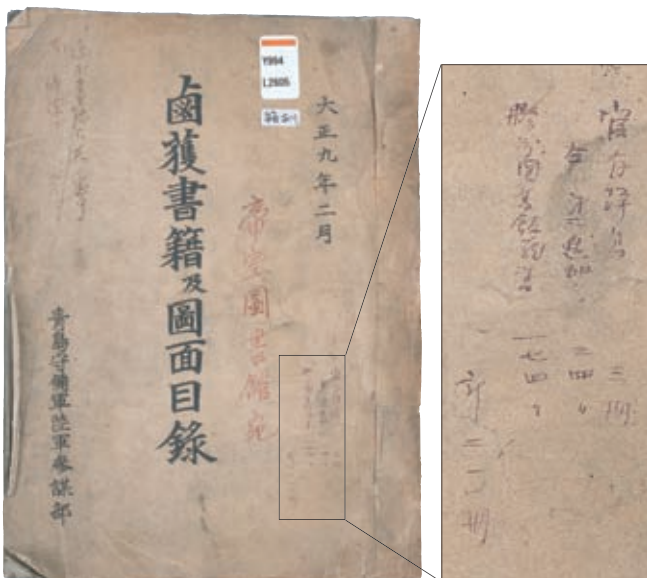
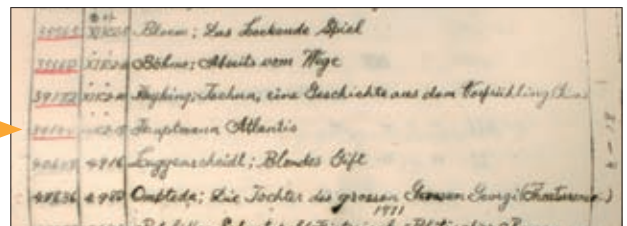


写真3 『函獲書籍及図面目錄』<請求記号 Y994-L2605>

表紙にある書き込みは、当館に分配された冊数と考えられる。整理後の分類記号Y995（別置措置洋資料）*の書架を見た限りでは、同様の由来をもつ洋書は140冊程度の存在を確認できる（ラベルや蔵書票、蔵書印が他の洋書と異なる）。表紙に「送付書籍二八其ノ番号二赤ノ傍線ヲ附シタ」とあり、「39194」の欄には赤い線と本書のタイトルが確認できる。

*この分類記号をもつ洋書は、保存のため、図書別室でご利用いただけます。





国立国会図書館（以下「NDL」）は、「保存協力プログラム」に基づき、国内外の図書館等の資料保存を促進するための活動を行っています。この活動には、地震や洪水などの災害により被災した図書館等の求めに応じた支援もあります。東日本大震災では、吉田家文書等の被災資料復旧支援¹を行いました。本稿では、その後の被災図書館への支援について紹介します。

常総市立図書館
熊本県立図書館
ネパール国立図書館

被災図書館の支援

被災図書館の支援



常総市立図書館

—水損資料の修復—

平成 27 年 9 月に発生した関東・東北豪雨は広範囲におよぶ浸水被害を引き起こしました。茨城県常総市水海道天満町にある常総市立図書館も床上浸水の被害を受け、14 万冊の蔵書のうち約 3 万冊に水濡れ被害が発生しました。これら被災資料のうち、再び入手できない資料については、同館及び茨城県立図書館からの依頼により、NDL が修復を行いました。

<被災資料の受け取り→リスト作成→冷凍>

平成 27 年 9 月 29 日、常総市立図書館より被災資料が段ボール 13 箱に詰められ当館に到着しました（写真 1）。カビが生えている資料もあったため、一刻も早い冷凍保管が必要でした。まず、

段ボールから資料を取り出し、被災資料リストを作成、その後、1 冊ずつポリ袋に入れ、冷凍庫へ入れるという作業を二人一組で行いました（写真 2・3）。

作業者のカビによる健康被害を防ぐため、高性能マスクと手袋、使い捨てのエプロンを着用しての作業です。資料は合計 148 点で、その日のうちにリストを茨城県立図書館へ送り、本格修復を行う資料の精査を依頼しました。常総市立図書館は、茨城県立図書館の協力を得て、重複調査や代替資料等の調査を行い、1 月に修復対象資料リストが当館に送られてきました。最終的には、絶版の紙芝居 12 点、和装本 10 点、洋装本 9 点の計 31 点となりました。この 31 点は代替物を入手できない資料であったことから、長期保存に適した材料を使用し、かつ閲覧等の利用に耐えうる強度を持たせるよう修復しました。



<被災資料の修復>

修復処置は基本的に、①撮影 ②解凍 ③解体 ④洗浄 ⑤乾燥 ⑥補修 ⑦再製本という工程を採りました。それぞれを詳しく説明します。

撮影・解凍・解体

まず、冷凍庫から資料をとり出し、処置前の状態を記録するため、資料の撮影を行いました。常温に5～10分程度置いておき、ページがめくれるようになったら、ページ番号を確認します。ページ番号がないものは、のど部分に鉛筆で小さく番号を振り、その後、ステープラーや綴じ糸を除去し資料を1枚ずつバラバラにしました。

洗浄と乾燥

次は汚れ等を取り除くための洗浄です。バラバラにした資料を1枚ずつ広げて不織布に挟み、10～15枚を一組にします。それをザルに挟んで固定し、ぬるま湯で2回、水で1回、洗浄し

ました(写真4)。これにより洗浄前の異臭は、ほぼなくなりました。洗浄後、再び1枚ずつ広げて刷毛でしわを伸ばし(写真5)、ろ紙に挟んで乾燥させました。

補修と再製本

乾燥後は、破れや欠損の補修です。でんぷん糊と楮の和紙を使って補修しました。基本的には元の表紙を利用できるものは補修して再利用しました。汚損がひどかったハードカバーの資料については、元の背表紙の背文字部分のみを薄く剥がし、表紙をつくり直して貼り戻しました。

<図書館の再開>

平成28年6月28日、修復が終わった資料31点を常総市立図書館に返却しました。同館は仮設図書館での業務を経て、同年10月4日、再開を果たしました。地域の方々の大切な資料の復旧に微力ながら支援できたことを嬉しく思います。



熊本県立図書館

— 職員を派遣して研修

平成 28 年 4 月に発生した熊本地震により、熊本県内では多くの図書館が被災しました。その一つである熊本県立図書館では、地震の衝撃により照明器具や書架など屋内設備の一部が損傷、また多数の資料が落下し約 2700 点が破損するなど、大きな被害を受けました（写真 6）。

< 職員の派遣 >

被災資料の救済要望を受け、NDL は同年 7 月 27 日から 3 日間、資料保存課職員 2 名を派遣し、被災資料の状態確認や県立図書館職員への修復技術指導を行いました。

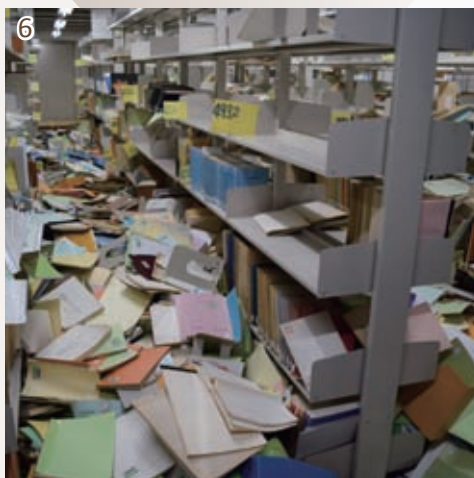
まず、館内の被災状況をヒアリングし、破損資料の状態確認を行いました。ほとんどの資料が外装、あるいはそれに伴う綴じや本の中身（本文紙）

に破損が見られ、落下の衝撃の強さが伺えました。協議の結果、修復を必要とする資料の中でも代替物入手できない資料約 120 点を優先的に処置することとし、それらを損傷度別に仕分けしました。その中でも比較的容易に補修できると判断したものについて、職員の方に実際に修復作業を行ってもらうこととしました（写真 7）。

< 研修と実習 >

実作業に入る前には、基礎的な補修技術に関する研修を行いました。主な研修項目は、①ページの破れに対し、和紙やでんぷん糊など長期保存に適した材料を用いる補修方法、②外れた背表紙と本文紙の間に筒を使って接着する補修方法、③簡易的な保存容器の一種である「簡易帙」の実習、④水損資料の対処法とカビが発生した資料のクリーニングの実演です。

これらの研修を踏まえた上で、被災資料の修復に取りかかりました。適宜講師が助言を行いなが



ら、職員自身が補修を進めていきます。この作業を通じ、2日間で破損資料約80点の修復処置をすることができました。様々な破損資料の修復を経験することで、基礎的な技術と判断力を身につけてもらうことができたと思います。残りの資料については、現在も継続的に補修が進められているとのことです。

<本格修復>

また、県立図書館での修復処置が困難と判断した5点については、NDLへ搬送し本格修復を行うこととしました。綴じ糸の切断やページの分離など、いずれも資料の構造自体に損傷が見られる資料であり、修復するには専門的な道具や技術が必要でした(写真8)。この5点についても、常総市立図書館の被災資料と同様に長期保存に耐える

修復を行いました。

作業の流れとしては、まず本文紙と表紙を取り外し、背についた古い接着剤を取り除きます。傷んだページを和紙とでんぷん糊で補修してから、麻糸や接着剤などで再び本文紙を綴じ直します。資料の破損状態や綴じ方によっては非常に手間のかかる作業です。その後、表装材も補修を行います。表紙布が著しく破損した資料には内側から新たに同系色の布を接着し補強しました(写真9)。最後に本文紙と表紙を接着して完成です。

県立図書館と協議しながら修復を進め、平成29年1月11日に作業を終え、資料を返却しました。手当てした資料が再び多くの方に活用されることを願います。



ネパール国立図書館 — 海外の図書館への支援

NDLは、IFLA（国際図書館連盟）のPAC（保存戦略プログラム）のアジア地域センター²として、アジア地域の資料保存の推進のため、情報提供・研修・技術援助などの保存協力活動を進めています。

< 情報提供 >

その一環として、平成27年4月に発生したネパール大地震と図書館等の被災状況に関する情報提供のため、同年7月2日にネパール事情に詳しい村山隆雄氏（聖徳大学教授）と山田伸枝氏（滋

賀文教短期大学司書講習講師）を招いて、説明聴取会を行いました³。村山氏からは、ネパールでは80年から100年周期で大地震が繰り返されているが、様々な理由により震災への備えが進んでいないこと、また山田氏からは、ネパール国立図書館（以下「NNL」）の被災状況を中心に報告がありました。NNLの蔵書は12万冊。人的被害はなかったが、倒壊の危険性があるため建物が立入禁止になったこと（写真10）、別棟の児童室は被災を免れたため、事務室をそこに移し、閲覧を限定的に再開しているとの報告がありました。

< 復興支援 >

このような報告を受け、アジア地域センターではNNLの復興支援のため、NNLの館長ヤダブ・



チャンドラ・ニラウラ氏（当時）とネパール教育省のヤム・バハドウル・バシャル氏を平成28年2月15日から19日まで招へいし、防災を中心とした資料保存に関する研修を実施しました（写真11）。一行は日本の図書館の概況についても学び、公共図書館等を視察しました。また、2月17日にはネパール状況報告会を国内の関係者を招いて開催しました⁴。ニラウラ氏からはネパールの図書館の概況と地震後のNNLの状況について報告がありました。NNLの図書館資料はビニール袋につめて近くの学校の教室に退避させ、袋から出して仮に排架しているところであるが、この仮置き場は非常に狭いため（写真12）、利用者サービスは不可能であり、政府は新しい図書館の建設予定地を探しているとのことでした。バシャル氏はネパールの教育制度と学校図書館について

報告しました。

アジア地域センターは今後もNNLと連絡をとりつつ、できるかぎりの支援をしていきたいと思っています。

（収集書誌部資料保存課）

- 1 「東日本大震災の被災資料復旧支援」 http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation/coop/spt_index.html
- 2 「IFLA/PACアジア地域センター」 <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation/iflapac/>
- 3 「ネパール大震災と図書館の被災状況」 <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation/news20150702.html>
- 4 「ネパール国立図書館長等の招へい」 http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation/coop/intl_2016npl.html



東日本大震災アーカイブ（ひなぎく）



震災記録の収集を続けています

「ひなぎく」は、東日本大震災の記録を国全体で収集・保存・公開するために構築されたポータルサイトです。国立国会図書館だけでなく他の公的機関や、報道機関、教育機関、NPO・ボランティア団体、そのほか一般企業といった様々な民間団体と連携し、それらが保有する震災に関する音声・動画、写真、文書などの記録を一元的に検索できます。

震災から6年、ひなぎく公開から4年が経過し、44のデータベースとメタデータ収集による連携を行い、約347万件（平成28年12月末現在）のデータが検索可能となりました。

ここでは、当館における東日本大震災に関する震災記録の収集の取り組みを紹介します。

国立国会図書館では、震災記録を重点的に収集しています。

震災記録の収集においては、紙媒体・デジタル媒体を問わず、音声・動画、写真、研究情報、ファクトデータ、刊行物・出版物、ウェブサイトといった様々なコンテンツを対象としています。そのため、収集方法は下記の通り、多岐にわたっています。

①国内出版物の収集

国内の出版物は、納本制度によって納入されます。地方自治体の取組の記録や地方の出版社の出版物などは、被災地域の県立図書館等が所蔵する資料の書誌データを参考に収集を行っています。

②ウェブサイトの収集

当館ではインターネット資料収集保存事業（WARP）により、日本国内のウェブサイトを収集・保存しています。震災直後から、国の機関や自治体のサイトは通常よりも高い頻度で収集しました。民間のサイトについては収集許諾が必要なため、震災

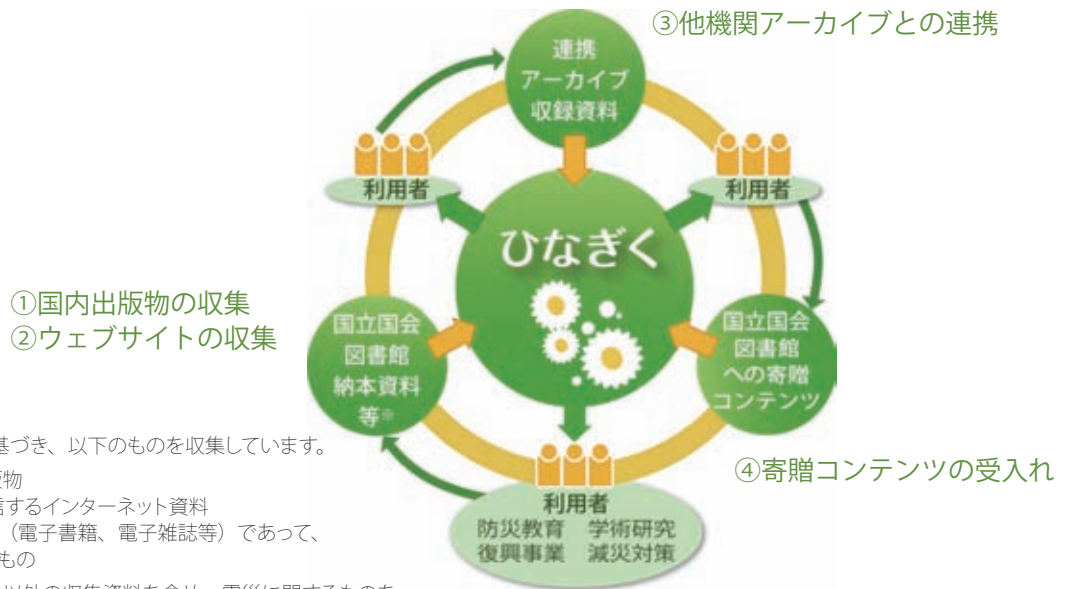
に関する情報を発信している民間団体に対して積極的な働きかけを行いました。収集した情報の中には現在は元のサイトからは消えてしまっているものも多くあります。

③他機関アーカイブとの連携

東日本大震災の記録は、各機関の特性に応じて各機関と分担して収集しています。地域で保存した方が良いと思われる記録や、デジタルカメラ等で個人が作成した記録などについては、個人からの投稿を受け付けている連携アーカイブへ登録していただくよう案内しています。

④寄贈コンテンツの受入れ

ひなぎくでは、被災地の航空写真や風景写真をはじめ、震災に関する画像・動画等を各種機関から独自に収集し整理して提供しています。平成28年度は、原子力規制庁の広報動画や、衆議院・参議院の審議中継動画などを収集しました。



※国立国会図書館法に基づき、以下のものを収集しています。

- ・国内で発行された出版物
- ・国等の公的機関が発信するインターネット資料
- ・民間のオンライン資料（電子書籍、電子雑誌等）であって、無償かつDRMのないもの

ひなぎくでは、上記資料以外の収集資料を含め、震災に関するものを検索対象としています。

所蔵資料のデジタル化の推進とひなぎく

当館では、平成26年度補正予算において約10億円規模の資料デジタル化経費が計上されたことにより、災害対応力強化の観点から、所蔵資料のうち、国の機関および地方公共団体等が刊行した防災関係資料、地方史・誌、学協会等が刊行した震災・災害関係の文献等を対象にデジタル化を実施しました。これらの資料は、平成28年6月に、国立国会図書館デジタルコレクションで提供を開始しました。一部の資料はひなぎくから検索できます。また、平成26年度の補正予算では、検索等の利便性を向上させるため、本文検索機能（右コラム参照）を開発し、ひなぎくに実装しました（本誌664/665（2016年8/9月）号p.26-28参照）。

今後も資料収集、アーカイブ連携等の事業を推進していきます。

（電子情報部

東日本大震災アーカイブコンテンツ構築班）

本文検索機能

ひなぎくは平成28年9月に新システムに移行し、本文検索機能を実装しました。国立国会図書館デジタルコレクションの画像に対し、本文テキストデータを機械的に作成しました。テキスト化した資料は、震災・防災関係の論文や国・自治体のパンフレット、1960～1980年代の都道府県の防災計画等、テキスト化の許諾を得た約2,000タイトルです。詳細検索画面で本文検索ができます。



詳細検索画面の「キーワード」の横にあるプルダウンで、「本文も検索する」または「本文のみ検索する」を選択

【利活用推進のための取組】高校生にモデル授業

平成28年3月に宮城県図書館と協力し、宮城県多賀城高等学校に於いて、ひなぎくを用いて防災教育のモデル授業を実施しました。モデル授業では、震災アーカイブについての講義のほか、ひなぎくを使った実習を行いました。今後も、ひなぎくを用いた利活用の可能性を探っていきます。



ある日の雛ちゃん菊ちゃんの会話

(雛) あれ? パッチリ二重がトレードマークの菊ちゃん、今日はメガネ女子になってイメージチェンジ?

(菊) イメージチェンジっていうか、最近疲れ目が辛いよ。ここのところずっとひなぎくの連携先のメタデータ登録してるから。

(雛) え〜! メタデータって、機械的に連携していて、ひなぎくで自動で更新されるんじゃないの?

(菊) 連携のかたちはいろいろあって、定期的にメタデータをファイルで送ってもらって、私が手動で登録しているものもあるの。

(雛) そうなんだ。具体的には何するの?

(菊) 新規公開分のデータだけじゃなくて、データ全件が届いた場合はデータベース管理ソフトを使って、まずひなぎくに新規登録するメタデータと登録済メタデータに分けるところからスタート。分けた後は、ひなぎくの管理画面で新規登録とか編集をするの。

(雛) 編集も必要なんだ。

(菊) そうなのよ。全部新規データとして登録できれば楽なんだけど、そうするとID番号が振り直しになるから、一度登録したものは編集しないとだめなのよ。データベース管理ソフトを使って編集用データを作るんだけど、件数があわなかったり、文字化けさせてしまったりしないようにと、ひたすら目視確認&指さし確認。

あ、さすがに指さし確認はしないけどね…。で、ごらんのとおり夕方には目がショボショボ。

(雛) ポータルの構築って地道な作業が必要なよね。

(菊) ひなぎくでメタデータを検索したら、ID番号(詳細情報画面で表示されるURLのhttp://kn.ndl.go.jp/#/part/の後の部分)を見てみて。Iの後ろがMになっていたら、それが私の可愛い分身たち。MはmanualのMだよ〜。

(雛) じゃあ今度注目してみるね。(普通そんなところ見ないわ…)

(電子情報部 東日本大震災アーカイブ

コンテンツ構築班 素敵女子)

ひなぎくの花言葉は、
「未来」「希望」
「あなたと同じ気持ちです」



保存修復と デジタル化の 両輪でめざす、 これからの資料保存

—「第27回保存フォーラム デジタル時代の資料保存」より

デジタル化という新しい技術の出現によって、図書館において「資料保存」という語が示す内容は変化してきています。近年急速に進んでいる図書館資料のデジタル化は、資料の持つ情報へのアクセス拡大だけではなく、デジタル化した画像を原資料の代替として提供することによって原資料を保護するという点で、資料保存のための施策としても重要なものです。しかし、資料の構造や扱い方に注意しなければ、撮影の際に資料を傷めてしまう可能性もあります。そのため、欧米の大規模な図書館などでは、従来紙資料を専門に扱ってきたコンサバター（保存修復家）がデジタル化のプロジェクトへ積極的に参加するようになってきています。国立国会図書館の資料保存課でも、外注で行うデジタル化の仕様書検討や撮影前の解体・補修のほか、デジタル化のための状態調査、館外での作業が難しい資料の撮影など、様々な点でデジタル化に関わりはじめました。どのように資料保存とデジタル化のバランスをとり、両立させていくかを探るべく、昨年12月7日に第27回保存フォーラムを開催しました。



※写真はいずれもボドリアン図書館
(左) 2010年に完成した最先端の書庫
(下) ラドクリフ・カメラという18世紀の建物





保存部門の修復室の様子

ボドリアン図書館から
講演「ボドリアン図書館におけるデジタル
化への資料修復アプローチ：支援と保存」



ヴァージニア・
リヤドブイサン氏

Ms. Virginia M. Lladó-Buisán

オックスフォード大学ボドリアン図書館
コンサベーション&コレクションケア部門長

オックスフォード大学ボドリアン図書館 (Bodleian Libraries) はイギリスでは英国図書館に次ぐ規模の図書館で、印刷物だけで 1,200 万点以上もの資料を所蔵しています。資料保存部門は特別コレクション部に属し、16 名のコンサバターと修復技術者、2 名の事務担当職員からなります。資料保存部門では環境管理や修復など資料保存業務を中心に、展示やデジタル化など資料のアクセス促進に関わる仕事や、資料保存のための研究活動も行っています。

デジタル化におけるコンサバターの役割とは

ボドリアン図書館では、内部の貴重な資料のデジタル化や他機関との共同プロジェクトなど、様々なデジタル化プロジェクトを実施しています。コンサバターは各プロジェクトの初期段階から関わり、資料の状態に関する判断を一手に担います。また、資料に触れるスタッフ全員に対し、貴重な資料の扱い方の研修も行います。撮影の前にはコンサバターが資料一点一点を確認し、安全な撮影のために補修が必要か、どのスキャナーを用いて撮影するべきか、その際にコンサバターの立ち合いが必要かを判断します。

こうした資料の状態の判断基準やスキャナーの評価基準を確立するまでは、デジタル化の技術について新たに多くを学ばなければなりません。大変な努力を要しましたが、スタッフの技術向上の機会としても捉えて、体制や伝統的な修復方法の改善も行いました。

コンサバターは SNS を利用した広報も行います。こちらは保存部門の Twitter アカウントです。この他に、Instagram のアカウントも運営しています。保存部門の SNS アカウントの作成はリヤドブイサン氏の発案で始めたことで、数人のスタッフで記事を書いているとのこと。



<https://twitter.com/bodcons>



たとえば、写真は、バチカン図書館とのプロジェクトで使われた2種類のスキャナーを用いた撮影の様子です。V字型のアクリル板を上から載せて撮影をする機種（左）は比較的速く安定して撮影できますが、V字の角度が固定なので開きの悪い資料には適しません。また、手描きの装飾の顔料など摩擦に弱くアクリル板を載せられない材質のものも多くあったため、そのような資料は角度の調節が可能で上に何も載せない機種（右）で、時間をかけて安全に撮影を行いました。

このように、コンサバターの役割はもはや現物の

コレクションに関わるだけのものではありません。しかし、最優先すべきはあくまでも原資料であり、それがコレクションや利用者にとっても利益になります。また、図書館が取り組み続けなければならない課題として、伝統的な保存修復とデジタル化のバランスを勘案する点があります。その決断のために保存部門の責任者が果たすべき役割はとても大きいのです。まとめとして、様々なプロジェクトでの経験から得られた、デジタル化プロジェクトを成功させるための要素4点を挙げます。

1. デジタル化プロジェクトには、すべての関係者が、最初から関与すること。
2. 適切なスケジュールを立て、資料や関係者に不必要なストレスを与えないようにすること。
3. 原則として、資料を復元したりより美しい状態にするのではなく、安全に撮影するために必要な最小限の処置を行うこと。
4. 資料保存の責任者が、資料へのアクセス拡大と保存のバランス決定の判断に関わること。

最後に、リヤドブイサン氏は2014年に完成したばかりのウェストン・ライブラリーに現れた“怪獣”を紹介しました。子供が持ち込んだ風船が施設内の人の手が届かない高い場所に落ちてしまい、新しい建物の美観を損ねていると最初職員たちは腹を立てたそうです。しかし徐々に愛着がわいてきて、みんな今では風船を気に入り、風景の一部のように感じているとのことでした。

ボドリアン図書館の資料保存部門にとってのデジタル化も、この怪獣のように予期せず降りかかってきたものでした。しかし、伝統的な修復方法の見直しなど、変化を受け入れる過程で得るものも多かったといいます。このように、変化を拒むのではなく受け入れていくことがどれほど良いことなのかを、リヤドブイサン氏は示唆しました。



一橋大学社会科学古典資料センターから 事例報告「西洋古典資料の媒体変換と 原本の保存」



床井啓太郎氏

一橋大学社会科学古典資料センター
専門助手

一橋大学社会科学古典資料センター（以下「センター」）は、主に1850年以前に西洋で出版された古刊本を専門に収集する研究図書館で、約8万冊を所蔵し、センター長、教授、助手2名、図書館員2名、保存修復工房スタッフ4名からなる比較的小規模な組織です。床井氏からは、1993年から2000年にかけて行われたメンガー文庫のマイクロ化事業での取り組みを中心に報告がありました。

デジタル化が保存の新たな原点に

メンガー文庫のマイクロ撮影にあたり資料への負担や破損への対処について検討をする中で、対象資料の撮影方法だけでなく、センターの所蔵資料全体に対して保存や利用の方針を確認していきました。それが、センターの媒体変換と保存対策の原点とな



<http://chssl.lib.hit-u.ac.jp/menger/index.html>

※英語のみ

メンガー文庫はオーストリアの経済学者カール・メンガーの旧蔵書です。前述のマイクロ化事業の終了後、2008年にその一部がデジタル化され、センターのwebサイトで見ることができます。

りました。

当初はマイクロ撮影後に撮影によって傷んだ資料のみを委託業者の責任で補修する予定だったが、結果として、大学側が事前・事後の補修に主体的に関わり、最終的にセンターの資料全点を調査・処置する体制へと変更しました。

また、事業に参加していた製本と修復の専門家から、撮影を資料へのリスクという面だけではなく、資料全点全ページに目を通すことができる保存にとってもまたとない機会と捉えるべきとの指摘を受け、以降そのように考えて媒体変換に取り組んでいます。センターでは2013年から貴重書も撮影できるスキャナーを導入し、撮影から補修までセンター内で完結してデジタル化を行える体制をつくっています。

国立国会図書館から



高橋幸伸

国立国会図書館収集書誌部資料保存課
保存企画係長

国立国会図書館からは、平成27年度に行ったデジタル化事業での資料保存課の役割や仕様書に盛り込んだ内容を中心に、デジタル化における資料保存課の取り組みを報告しました。

詳しくは、第27回保存フォーラム Web ページ (<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/preservation/coop/forum27.html>) の報告資料をご覧ください。Web ページにはリヤドブイサン氏と床井氏の報告資料も掲載しています。

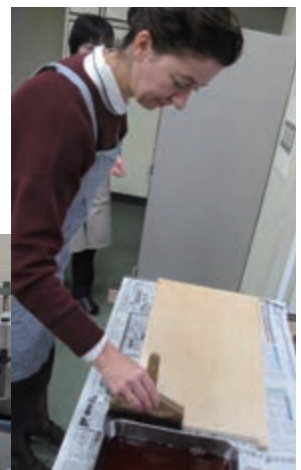
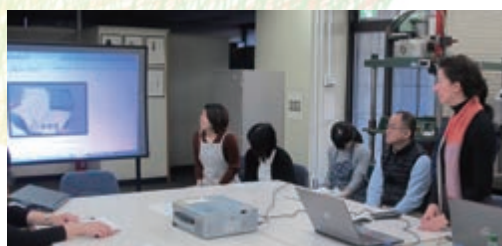


保存フォーラムの翌日は、リヤドブイサン氏と資料保存課職員との業務懇談会を行い、ボドリアン図書館の保存部門で扱う業務や方針について更に詳しく伺い、交流を深めました。また、「仮張り」（日本の伝統的な表装や修復で乾燥の際に用いるパネル）の模型づくりの体験も行いました。

資料保存課とボドリアン図書館保存部門は1992年と2002年に人材交流をしており、リヤドブイサン氏は今後もこのような共同の取り組みをしていきたいと考えているということでした。

（収集書誌部資料保存課）

(右) 「仮張り」 模型づくりの様子
(下) 業務懇談会の様子



デジカフェ はじめました

平成 28 年 11 月 24 日・25 日に、東京本館で、デジタルライブラリーにかかわる研究や最新動向をもっと身近に、分かりやすく紹介する講演会「NDL デジタルライブラリーカフェ」(略して「デジカフェ」)を開催しました*。「サイエンスカフェ」の手法を取り入れたこのイベントは、国立国会図書館初の試みです。

国立国会図書館では「国立国会図書館デジタルコレクション」(略して「デジコレ」)をはじめ、様々なデジタルライブラリーを、インターネットを通じて提供しています。これらのデジタルライブラリーは、図書館内での利用はもちろん、研究やアプリケーション開発などへ活用の場が広がっています。今回のデジカフェでは、デジコレの新たな活用例を 2 つ取り上げ、これらの活用に取り組まれているゲストをお招きしました。当日は、ゲストが紹介する最新の話題について、20 名ほどの参加者を交えて語り合いました。

NDL
デジタルライブラリー
カフェ

「サイエンスカフェ」とは、科学者と市民が気軽に科学の話題について語り合う場を作ろうという試みで、市民と科学者、研究者をつなぐ新しいコミュニケーション手法として、大学や研究機関で広く行われています。デジカフェでは、デジタルライブラリーに関係のある様々なテーマを取り上げ、紹介します。

NDL DIGITAL LIBRARY

Cafe

Newly Opened!

日替わりメニュー

24 日

オープンデータ×シビックテック×デジタルコレクション
～デジコレを使って地域の昔を調べる Web サイトを開発～

25 日

デジタルコレクション 自動テキスト化への道

*「NDL デジタルライブラリーカフェ」開催のご案内
<http://lab.ndl.go.jp/cms/digicafe2016>

11月
24日

オープンデータ × シビックテック × デジタルコレクション

～デジコレを使って地域の昔を調べるWebサイトを開発～

現在、国を挙げた「オープンデータ」の推進を受けて、ITを使って市民自らが社会や地域を改善する「シビックテック」とよばれる活動が全国的な広がりを見せています。東氏からは、オープンデータとは何かといった基本的なところから、社会で実際に活用されている事例までご紹介いただきました。小池氏からは、デジコレを使ったシビックテックの事例として、デジコレに含まれる江戸時代の地誌を現代の地図から簡単に使えるようにした「江戸後期 武蔵・相模国 村名マップ」をご紹介いただき、このウェブマップの作成に当たって、気づいたことや苦労したことなどをお話いただきました。



東修作氏

Open Knowledge
Foundation Japan 事務局長

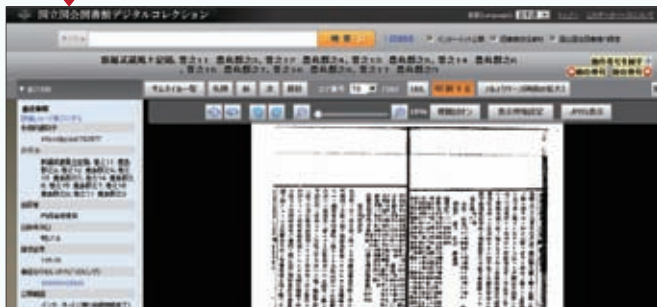


小池隆氏

合同会社緑IT事務所代表



<https://fudoki.midoriit.com/>



興味や課題意識を
どうやってオープンデータと
結びつけるのですか？

データはあくまで手段です。
興味や問題意識といった
熱烈的な思いが先にあるべき！
課題を持つ人とデータ提供側を
つなく窓口があると、もっと良い
インタラクションが生まれそう。

デジタルコレクション 自動テキスト化への道

デジコレには、明治～昭和中期の日本近代の書籍約 35 万冊が含まれ、誰でも使えるようになっています。しかし、これらは画像の形で公開されているため、本文テキストによる検索ができません。一般に、書籍の画像から文字を読み出す（自動テキスト化する）には OCR（Optical Character Recognition：光学文字認識）とよばれるソフトウェアが使われますが、現在の OCR では、近代の書籍の文字を正確に読み取ることはできません。城氏は、デジコレ画像から活字（文字）の画像データを集め、近代書籍用の OCR の開発に取り組まれています。研究を始めた経緯やそこで直面した課題、研究の成果などを、OCR 開発に利用した人工知能等の技術解説を交えながら、分かりやすくお話いただきました。



城和貴氏

奈良女子大学理学部教授

近代の書籍だと、印刷によってはどれが1つの文字なのか認識することが難しそうですが？

綺麗な状態の資料なら簡単ですが、折り目やゴミがついた資料は特に難しいです。これからの研究課題ですね。

開発にあたって、多くの種類の文字を集める必要があると思いますが、現在残っている文献にはなかなか登場しない文字もあるのでは？

他の文字から特徴を学習する「ディープラーニング」を用いれば推定でき、代替手段として利用できます。

今後も、デジカフェを通じて、国立国会図書館のデジタルライブラリーが持つ可能性を紹介していきたいと考えています。多くの方のご参加をお待ちしています。

（電子情報部電子情報流通課、電子情報サービス課次世代システム開発研究室）

「明日の文化遺産は 今日のデジタル情報の上 に成り立つ」*



オープンサイエンスと図書館、ヨーロッパの事例



クリスティーナ・ホルミア
＝ポウタネン氏

* 記事のタイトルは、現在LIBERが策定している戦略中の文言 "Tomorrow's cultural heritage is built on today's digital information." による。

学術論文を無償公開するオープンアクセスが広がりを見せる中、論文執筆に利用した研究データなどもインターネットで公開し、学術研究の成果を誰もが自由に利用できるようにしようという世界的な動きが**オープンサイエンス**です。これにより、透明性の向上、より良質な研究、より高い水準の市民参加、科学的発見の加速がもたらされると考えられています。その中で、図書館には、オープンアクセスの推進、オープンデータの保存・管理を行う基盤的な役割が期待されています。

昨年11月に、国立国会図書館では、欧州研究図書館協会 (LIBER) 会長であり、フィンランド国立図書館ネットワークサービス部長のクリスティーナ・ホルミア＝ポウタネン氏をお招きし、オープンサイエンスをテーマにシンポジウムを開催しました。ここでは、LIBERの活動、そしてフィンランド国立図書館でのオープンサイエンスの取組みについて簡単に紹介します。

国際シンポジウム オープンサイエンスの潮流と図書館の役割 (2016年11月15日開催)



【講演】ヨーロッパの研究図書館におけるオープンサイエンスへの取組について

クリスティーナ・ホルミア＝ポウタネン氏 (Ms. Kristiina Hormia-Poutanen)

【講演】オープンサイエンス推進の国際的枠組みと日本の近況
村山泰啓氏 (国立研究開発法人 情報通信研究機構 統合ビッグデータ研究センター研究統括)

【鼎談】オープンサイエンスの潮流と図書館の役割

クリスティーナ・ホルミア＝ポウタネン氏
喜連川優氏 (大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 国立情報学研究所長)
村山泰啓氏 (※モデレータ)



LIBER のメンバー



フィンランド国立図書館

LIBER とは、40 か国 400 以上の研究図書館、大学図書館、国立図書館などが参加する、欧州最大の研究図書館ネットワークです。2016 年から 2017 年にかけての LIBER の戦略では、その最優先事項にオープンサイエンスの推進を掲げ、以下の取組みを行っています。

○ 研究データ管理 (RDM)

欧州研究大学連盟 (LERU) の研究データロードマップの立案・作成など。このロードマップは LERU の参加館が、研究データ管理を行うに当たり、参考となる事例を紹介しており、RDM 関連の国の計画や戦略を作成するためのモデルとなっています。

○ EU プロジェクト

研究データ基盤共同構築プロジェクト (EUDAT) やオープンアクセスリポジトリに関する欧州の地域ネットワーク (OpenAIRE) など、オープンサイエンスに関連する欧州連合の多くのプロジェクトに積極的に参加しています。

○ アドボカシー (政策提言)

オープンアクセス、RDM、インフラ、著作権、テキスト・データ分析などに関する政策提言に取り組んでいます。

フィンランド国立図書館では¹、情報のオープン化は信頼を生み、利用者のアクセスを容易にし、社会的影響力を強めることができるという考えのもと、サービスのデジタル化とオープン化を目標に掲げています。国内機関の電子ジャーナル契約をまとめるナショナルサイトライセンスの事務局として、学術雑誌のオープンアクセス化を推進しています。また、フィンランド政府のオープンサイエンス&リサーチ・イニシアチブに参加し、国内での機関リポジトリの提供や研究者向けの研修を通して、オープンサイエンスの普及に努めています。このイニシアチブは、昨年、国内の大学や研究機関の学術雑誌購読費用の詳細を公表したことで話題になりました²。

(利用者サービス部サービス企画課、科学技術・経済課)

¹ フィンランド国立図書館のオープンサイエンスの取組みは同図書館のウェブサイトで紹介されています。

OPEN SCIENCE AS CO-OPERATION <https://www.kansalliskirjasto.fi/en/open-science-as-co-operation>

² Academic publisher costs

https://avointiede.fi/web/openscience/publisher_costs

カレントアウェアネス-Rでも紹介しています。

<http://current.ndl.go.jp/node/31801>

シンポジウムの詳細については以下のページをご覧ください。講演資料、議事録も公開しています。

<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20161115symposium.html>

カレントアウェアネス-E (No.318) でも報告しています。

<http://current.ndl.go.jp/e1880>



韓国の「首都」はソウル（Seoul）特別市である。青瓦台と称される大統領府も、青いドーム屋根の国会議事堂も、そして大法院（最高裁判所）も憲法裁判所も国立中央図書館も、すべてソウル市内にある。

しかし行政省庁については、すべてがソウル市内にあるわけではない。近年、日本でも一部中央省庁の地方移転が話題となっているが、韓国では大統領の下で行政を総括する国務総理府のほか、企画財政部、国土海洋部、環境部、教育部、文化体育観光部、法制処、国税庁など、9部2処2庁の省庁がソウル市から約130キロ南下した新しい都市、世宗（Sejong）特別自治市に置かれているのである。

2004年、当時の盧武鉉^{ノムクソン}大統領が提唱していた「首都移転」は、論争の末、憲法裁判所の判断で頓挫するに至った。しかし、首都移転計画は形を変えて「行政都市」建設計画となり、この行政都市は「世宗特別自治市」と名付けられた。「韓国の子どもたちが尊敬する歴史上の人物」として代表的な2人のうちの1人、李氏朝鮮第4代国王である世宗大王の名を付したのである（もう1人は豊臣秀吉の朝鮮出兵を撃退した李舜臣）。

筆者は2016年秋、調査のため韓国に出張した際にこの世宗市を訪れ、韓国国立中央図



世界図書館紀行

韓国・国立世宗図書館

白井 京



書館初の支部図書館である国立世宗図書館を訪問する機会を得た。

今回は、広大な地に建設された世宗市の様子とともに、数々の建築デザイン賞を受賞*した国立世宗図書館をご紹介します。

ソウル市から世宗市へ

ソウル市から世宗市に向かうには、いくつかの方法があるが、まずは車。高速道路ののって片道2時間である。ソウル市内の自宅から世宗市にある本庁舎に出勤する公務員のなかには、朝6時台の直通バスに乗る者も多いと聞く。

鉄道好きであれば、韓国鉄道公社 (KO-RAIL) の韓国高速鉄道 (KTX) に乗車して約45分の五松 (Oseong) 駅、または約1時間の大田 (Daejeon) 駅で下車し、そこからこの二つの駅を結ぶ、BRT (バス高速輸送システム) を利用する方法をおすすめしたい。

今回は、大田駅からこのBRTで向かうことにした。ソウル駅 (写真1) からKTX釜山行きに乗車すると、車内には休暇中と思われる軍人の姿もちらほら見える (写真2)。列車の座席やアナウンスの雰囲気似ていることから日本にいるような気分になることも多いが、やはり異国なのだと思が引き締まる瞬間

である。

大田駅で降り、バス停でBRTに乗車する。BRTは一見、普通の大型バスである。世宗市中心部まで30km以上。決して距離が短い訳ではないのだが、高速道路を使用する上、BRTの専用車線があり、また交通量自体少ないこともあってかなりのスピードで走るので、思いのほか短時間で到着する。

バスに揺られながら世宗市内に入ると、広大な敷地に美しくデザインされた大きな建物がぼつぼつと目につくようになる。世宗市庁舎、政府関係の研究所などの建物である。余裕のある空間を贅沢に用いた、凝ったデザインの建物が多い (写真3)。

新都市建設後、人口も増加しているようで、新築の高層マンションやスーパーなどの生活施設も目につく。新たなマンションの建築現場も多い。

世宗市政府庁舎

BRTで政府庁舎の立ち並ぶ中心地に到着して下車すると、思わず立ちつくして周囲を見回してしまう。広大な土地に、見渡す限り、政府庁舎が連なっている (写真4)。

「連なっている」という表現は、まさにこの政府庁舎の姿を的確に描写している。なに

* 建築・デザイン分野で著名なデジタルマガジン「Designboom」の“TOP 10 libraries of 2013” <<http://www.designboom.com/architecture/top-10-libraries-of-2013-12-21-2013/>>、2014年韓国建築文化大賞 (社会公共部門) <http://www.kira.or.kr/munhwa/news/2014/12_l.jpg>等。



しろすべての庁舎が、隣の庁舎とあたかも手をつないでいるかのように空中回廊で結ばれて並んでいるのである。官庁街という言葉から想像するような、高層ビル群ではない。中層の巨大な建物が、空中に浮かぶ通路で一体化されている。企画財政部から海洋水産部、そこから農林畜産食品部へ、国土交通部へ、環境部へ、そして法政処へ…。大きな青空が広がる広大な空間にぐると連なった巨大な建築物群が浮かび上がる。各省庁を結ぶ空中回廊には、片道四車線の道路を横切り100mに達すると思われるものもある。

残念ながら、この光景を見た時の衝撃は、パノラマ写真で撮影した画像を掲載したとしても十分にはお伝えできないだろう。その場に立って周囲をぐると見回し、思わず口を開け、目を疑って再度見回し、そして息をのむ。そんなスケールの超・超・巨大庁舎である。地上から見ているとわかり辛いが、このいくつもの連なった政府庁舎を空から見下ろすと「龍」の形を形成しているのだ(写真5)。

国立世宗図書館のキム・インスク司書によれば、これら政府庁舎全体を高層化させずに横につなげたのは、韓国の省庁が陥りがちな縦割り意識、すなわち「垂直的」な意識を改善し、省庁の枠を超えてお互いにより柔軟なコミュニケーションがとれる「水平的」な政府となるようにとの意図があるとのことであった。



国立世宗図書館

広大な敷地に立ち並ぶ庁舎のうち、教育部や文化観光体育部の庁舎に近く、市民の憩いの場である世宗湖水公園のほとりに位置するのが、国立世宗図書館である。

湖水公園を背に、大きな曲線を描く美しい建物が目を引く。あたかも大きな一冊の本を広げて置いたかのようなデザインである(写真6)。

世宗図書館は2013年12月12日に開館した。建物は地下2階地上4階、敷地面積29,784㎡、延べ建築面積21,079㎡の規模である。

正面入口から中に入ると、大きな吹き抜けの空間が広がっている。あちらこちらに配置されたソファに座り本を読む男性、机を囲んで本を片手に語り合うスーツ姿の男女、ベビーカーで眠る赤ちゃんの横で読書にふける母親、雑誌を眺めながら時折顔を上げてぼんやりと景色を眺める若者、館内のカフェでコーヒーとお喋りを楽しむ女性たち。たくさんの人々が、リラックスして充実した時を過ごしている様子が目に入る。解放感に満ちており、全面ガラス窓から差





し込む陽ざしが心地よい (写真7)。

全面ガラス窓ではさぞ光熱費が…と心配する向きもあるだろうが、世宗図書館は使用するエネルギーの約30%を太陽光と地熱から得ているエコ図書館でもある (写真8)。

ロビーからゲートを通して館内に入ると、書架が整然と並んでいる。館内を案内してくれたキム・インスク司書によれば、ホールに置かれた開架資料は、十進分類法ではなく利用者のニーズに合わせた配架方法をとっているという。

建物の美しい曲線に沿って設置された閲覧スペースもユニークである。韓国の伝統的なオンドル床のようなスペースに座り込んで本を読んでいる人もいれば、パーティションにたくさんの団扇を用いた空間で勉強に励む学生もいる (写真9)。吹き抜けに向けて置かれた心地よさそうな一人がけソファに座って読書を楽しむ人もいる (写真10)。平日の午後だというのに、閲覧スペースはほぼ満席とっていいほど利用者が多い。

館内には、可愛らしい真っ赤な電話ボックスがいくつか設置されている (写真11)。中に公衆電話が設置されているのではなく、携





a



d



b



e



c



f

a. 1階一般資料室の書架の様子 b. 子ども公園につながっている子ども資料室内部 c. 図書館ロビーで開かれた人形劇の公演 d. 3階から見た子ども資料室全景 e. 夏の読書キャンプに参加し本を読む子どもたちの様子 f. 2階逐次刊行物コーナーから望む政策資料室の様子 (韓国国立世宗図書館提供)



帯電話を使用したい利用者のために用意されているとのこと。

また、世宗図書館は、児童サービスにも力を入れている。湖側に位置する子ども公園にもつながっている地下1階が、児童サービススペースになっている。子ども公園とこのスペースをつなげて設置することで、図書館と公園を一体化し、子どもたちが「図書館」を「声を出したり走ったりしてはいけない面白い場所」と認識しないよう工夫したそうだ。

国立世宗図書館の機能

世宗図書館の機能は、大きく二つに分けられる。一つ目が、政策情報総合センターとしての図書館である。行政府のための図書館として、白書や法令、統計、報告書といった政策関係資料を所蔵し、周辺の庁舎に勤務する行政府職員らを対象に様々な形で政策情報サービスを行っている。公務員向けの教養講座も開催しており、2016年下半期の「連続講座」の案内をみると、なかなか興味深い。様々な講師を招き、「成果を得る説得コミュニケーション」「ジェスチャーから探る感情疎通トレーニング」「思考の構造化技術とマインドマップの活用」といったタイトルが並ぶ。こうした講座を通じて異なる省庁に勤務する職員同士がコミュニケーションを深め、政策形成に役立てることも期待されているという。

そしてもう一つが、近隣住民のための複合文化センターとしての図書館である。一般利用者、子ども・青少年を含む利用者サービスのほか、読書プログラム、音楽会などの文化行事、イベント開催や教養講座の開催にも力を入れている。新しい都市である世宗市には劇場、コンサートホールといった施設がないことから、文化的なイベントを求める利用者

の要求に応えようと、図書館の枠組みを超えた活動も視野に入れ、サービス提供を行っているように感じられた。母体である国立中央図書館が、文化政策を所管する文化体育観光部の傘下にあるのもその要因の一つかもしれない。

おわりに

「場としての図書館」—the library as placeが論じられるようになって久しい。今回、世宗図書館を見学して改めてこの言葉を実感した。世宗図書館は、世宗市という新しい都市で働き、生活する市民たちに、意欲的に「場」を提供しようと試みている。それは政策形成のための場でもあり、学ぶ場でもあり、人々が語り合い共有する場でもある。そして児童をも含めた市民が集う場でもある。見学を終了して夕刻、仕事や打合せを終えて首都圏に帰宅するのであろう公務員や会社員でいっぱいBRTに乗る。後ろを振り返って目を凝らすと、全面ガラスから照明の光が漏れる美しく大きな一冊の本が見える。あの大きな本—世宗図書館—は、これからこの新しい都市とともにどのように成長し、どんな歴史を刻んでいくのだろうか。

(しらい きょう)

調査及び立法考査局外交防衛課)

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

陸にあがった海軍

連合艦隊司令部日吉地下壕からみた太平洋戦争

神奈川県立歴史博物館 編
2015.1 119p 28cm

<請求記号 GC76-L22>

東急東横線日吉駅を出て、綱島街道を横断すると、慶應義塾大学日吉キャンパスの銀杏並木が続いている。多くの学生たちでにぎわう平和そのもの日吉キャンパスに、かつて連合艦隊司令部が設置され、巨大な地下壕が建設されていたことを筆者が知ったのは、大学生になってしばらくして、学生向けの日吉地下壕見学会の案内を目にしたときである。そのときは抽選に漏れて参加できなかったが、身近にありつつも秘密を隠した存在として、日吉地下壕のことは気になっていた。

本書は、その日吉地下壕に焦点を当てた展示会の図録である。平成23年度～平成25年度に、神奈川県立歴史博物館が慶應義塾大学と共同で実施した太平洋戦争期の遺構調査の成果が紹介されている。本来は洋上の旗艦に置かれ、司令長官が前線で指揮を執る拠点であった連合艦隊司令部が、1944年秋、戦局の悪化で「陸にあが」ることを余儀なくされた経緯もわかりやすくまとめられている。しかしやはり注目すべきは日吉地下壕内部の様子だろう。戦艦大和の沖縄出撃、神風特別攻撃隊などの太平洋戦争末期を象徴する悲劇的な作戦の指令が、どのような場所から発出されていたのかが垣間見えるからである。

日吉地下壕の構築や使用に関する記録は、現在ではほとんど失われてしまっているという。本書では、

地道な調査によって、これまで見落とされていたさまざまな事実を解明している。かつて日吉地下壕で勤務していた通信兵から、壕内では白熱灯ではなく、当時珍しかった蛍光灯を使用していたこ



とを聞き取り、地下壕内で採集された蛍光灯プラグからそれを裏付け、さらにメーカーに現存している同型品を探し出すなど執念を感じる。石原裕次郎主演の映画『あいつと私』（中平康監督、1961年）に、現存しない耐弾式堅坑が写り込んでいるのを見出したのも、膨大な資料を駆使した成果だろう。

本書を通覧すると、発掘という考古学的な手法がしばしば使用されていることがわかる。わずか70年程度しか経っていないのに、記録や記憶から欠落してしまう物事がいかに多いかを端的に示している。歴史の風化に抗う本書は貴重な存在である。

本書に掲載された平面図から、下りの東海道新幹線で多摩川を渡って二つ目のトンネルである日吉トンネルは、日吉地下壕と交差していることがわかる。ちなみに、一つ目のトンネルは慶應義塾大学矢上キャンパス直下の矢上トンネルで、こちらの付近には弥生時代～古墳時代の遺跡が眠っている。毎日、大勢の人々が利用する日本の大動脈のすぐそばにも、歴史が堆積している。今度、東海道新幹線に乗る際には、日吉地下壕にも思いを馳せてみたい。

(電子情報部システム基盤課 とみたじょうじ 富田穰治)

法規の制定

【規則第1号】 国立国会図書館事務文書開示規則及び国立国会図書館資料利用制限措置に関する規則の一部を改正する規則

(平成29年1月19日制定)

事務文書の開示等に係る苦情申出を受け付ける期間について、当館が通知又は説明書の交付を行った日の翌日から3か月とした。平成29年1月19日から施行された。

この法規による改正後の国立国会図書館事務文書開示規則（平成23年国立国会図書館規則第4号）および国立国会図書館資料利用制限措置に関する規則（平成28年国立国会図書館規則第2号）は、国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp/>）>国立国会図書館について>関係法規（<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws.html>）に掲載している。



お知らせ

■ 「日本十進分類法（NDC）新訂10版」の適用を開始します

4月から、国立国会図書館で作成する書誌データについて、「日本十進分類法（NDC）新訂10版」（NDC10版。以下他の版でも同様）の適用を開始します。

4月1日以降に新規作成した書誌データには、NDC10版の分類記号を付与します（付与対象はNDC9版を適用している資料と同じ）。

NDC10版を適用するに当たっての当館における指針と分類表の解釈を示した「国立国会図書館「日本十進分類法（NDC）新訂10版」分類基準」を公開しています。次のページをご覧ください。

国立国会図書館ホームページ（<http://www.ndl.go.jp>）>国立国会図書館について>書誌データの作成および提供>書誌データ作成ツール>分類・件名（NDLC、NDLSHなど）

URL http://www.ndl.go.jp/jp/data/catstandards/classification_subject/index.html

4月1日以降、NDC10版の分類記号を付与した書誌データについては、NDC10版の分類記号のみを提供します。ただし、国立国会図書館サーチでは当面の間、NDC10版を機械的に変換したNDC9版の分類記号もあわせて提供します。



お知らせ

■ 講演会「私が子ども時代に 出会った本—志茂田景樹」

国際子ども図書館では、4月23日の「子ども読書の日」にちなんで、日本ペンクラブとの共催で講演会シリーズ「私が子ども時代に出会った本」を開催しています。

シリーズ第5回となる今回は、作家の志茂田景樹氏をお招きし、子ども時代の読書や出会った本に関する体験談を伺います。

子どもの頃に読んで感動した本は、いつまでも心に残るものです。自身の読書体験を振り返ったり、子どもの読書活動についての関心と理解を深める機会として、ぜひご来場ください。入場は無料です。

- 日 時 4月16日（日）14：00～16：00
- 会 場 国際子ども図書館 アーチ棟1階 研修室1
- 講 師 志茂田景樹氏（作家）
- 対 象 中学生以上（定員100名）
- 申込開始 3月8日（水）
- 申込方法

次のいずれかの方法で、1通につき参加希望者1名をご記入の上、お申し込みください。定員に達した時点で受付を終了します。

[申込みフォーム]

国際子ども図書館ホームページのイベント情報にある参加申込みフォームからお申し込みください。お申込みには電子メールアドレスが必要です。

イベント情報URL <http://www.kodomo.go.jp/event/event/event2017-02.html>

[往復はがき]

「往信用裏面」に①氏名（ふりがな）、②年齢、③郵便番号、④住所、⑤電話番号、「返信用表面」に返信先の①郵便番号、②住所、③氏名をご記入の上、下記申込み先までお送りください。

※いずれも、2週間以内にメールまたは返信はがきでの連絡がない場合は、下記問合せ先にご連絡ください。

- 問合せ・申込み先
国立国会図書館国際子ども図書館「4月16日講演会」担当
〒110-0007 台東区上野公園12-49
電話 03（3827）2053（代表）

お知らせ

■ 新刊案内

国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 792号 A4 71頁 月刊 1,000円(税別) 発売 日本図書館協会

平成29年の年頭のご挨拶

日本の産業立地と対日直接投資促進策—外資参入の阻害要因の検討—

ドイツとイタリアの生殖補助医療の制度

地方創生の財源としての地方創生関連交付金—石川県における事例を踏まえて—
— (現地調査報告)

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Atlantis by Gerhart Hauptmann- one book's journey across the Eurasian Continent
- 04 Supporting libraries recovering from natural disasters
- 11 The NDL Great East Japan Earthquake Archive "HINAGIKU"
 Continuing to acquire records of natural disasters
- 14 Conservation, restoration, and digitization
 — three pillars in the future of preserving library materials
- 19 Welcome to the NDL Digital Library Cafe
- 24 Travel writing on world libraries:
 National Library of Korea, Sejong
- 22 <TOPIC>
 ○ "Tomorrow's cultural heritage is built on today's digital information." - Open Science and libraries in Europe
- 30 <Books not commercially available>
 ○ *Riku ni agatta kaigun: Rengō kantai shireibu hiyoshi chikagō kara mita taiheiyō sensō*
- 13 <Tidbits of information on NDL>
 A conversation between Hina-chan and Kiku-chan
- 31 <NDL NEWS>
 ○ Rules & regulations
- 32 <Announcements>
 ○ 10th edition of *Nihon jisshin bunruiho* (Nippon Decimal Classification, NDC) now being applied at the NDL
 ○ Lecture "Books I encountered in my childhood: Mr. Kageki Shimoda"
 ○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成 29 年 3 月号 (No.671)

平成 29 年 3 月 1 日 発行

発行所 国立国会図書館

編集者 秋山勉

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
 電話 03 (3581) 2331 (代表)
 F A X 03 (3597) 5617
 E-mail geppo@ndl.go.jp

印刷所 株式会社 丸井工文社

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
 本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
 本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 刊行物 > 国立国会図書館月報でご覧いただけます。



『阪神名勝図絵 第3輯』から「神戸波止場」
赤松麟作〔作〕 金尾文淵堂 大正6（1917）年
37×27cm
<請求記号 Y994-L3178 >

国立国会図書館月報

平成29年3月1日発行（毎月1回1日発行）
（3月号通巻671号）